後撰和哥集

上

後撰和歌集巻第一

春哥上

元日に二条のきさいの宮にてし
ろきおほうちきを給りて

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつつ
春きにけりとおどろかれぬる

春たつ日よめる　凡河内躬恒

春たつとききつるからにかすかやま
消あへぬ雪の花と見ゆらん

蔭基王

くさわかは萩乃やけはらきゝふて

わかなつむと詠をとさそそむ
あるる人のもとにはまいはまのめの
侍るける月日ひさしくへても月
乃つらちことろよまへゆるまとふ
見るよる雪のふるを見て

よみ人しらず

しら雪のうへしるふりくる春雨の
ふるにつひあるまといつまぬる

朱雀院乃子日におはしまし
けるによそふりはへてえつ
かうまつりて延光朝臣につ
かはしける　左大臣

松も引若菜もつます成ぬるを
いつしかさくらはやもさかなん

河曜文庫

院御返し

まつる人しなけれは春の乃
わかなも日もひとつもわかれ

子日に君乃もとよりわけて小松
ひきにおこせしまいらせ給ふとていへるを
きゝて　よみ人しらず

君乃ためや野へに小松をひきつれし
我もゝろともに摘むわかなを

いらへ

すまさる春日の野辺のわかなも
成見てしたふ人もつむやらむ

子日したりける人のもとへたてまつる
まちてつかはしける

見つね

春乃いる心をつくりもやらぬまは
わかなをつみて年をこそつめ

宇多院に子日せんとありけれは式
部卿のみこをさそふとて
行明親王

春の野へ見にはいりぬといふなるを
いさとも誘はゝわかなつみてん
御前の前にてまきの女御
手乃松にあやはかる春風や
池浪に深わかをけふいとくらん
寛平御時きさいの宮の歌合の
うた　よみ人しらず

はる風や花はまた来ぬと告つらん
梅にこもれるも咲にけり
さる寺はかはやまとへおとなひ
きそしまかはかる程にやどりて
侍りける人の家の梅のむすめを四月
かけて侍りけれどもやむ〻まかる
ことなはかはてふかはのはかなくか
あらる春おやのもとはつかし
ける

みはよ

ちり際よおもふ中ふかく見てしよわ
心をつねよたえひやるかふ
けよりける宿のもとはうのすこ
ける宿の庭の木の梅にふりける

梅をおりて侍りけるに

亀児王母

言えいつる木の花見てをもを かふく
梅よし梅の花をさしそ
花の宿つゝへまかりて侍りける
まめつくしき程にまうけね
いりふとし侍りけるを深くとしふ
くひとりよあひ侍りのをれはむ
月のつゐるちるにまいりつゐ
し侍りける よるへしもち
んつらみなる宿ふつらん春の野の
色はとけぬるもとのよしまは
ふいしもち 累院左大臣

手つからおりつる物を梅花
ちるまでにこぬやいかにせん
前栽にこうばいをうへて又の
春をそくさきければ
中納言兼輔朝臣
宿ちかくうつしてうへしかひもなく
待遠にのみにほふ花かな
延喜御時哥めしけるに奉
りける　きのつらゆき
春かすみたなびきにけり久方の
月乃かつらも花やさくらむ
おなし御時御屏風によませ給ける
くるこゝろにまつめるよしを欲
てたまはせよとおほせらく
てある人に送りて侍ける
十二首のうち　みつね
いつこにも春乃光はわかなくに
まだみ吉野乃山は雪ふる
人のもとにつかはしける
伊勢
ちるをつゝむ袖のこなたるを
春を淀もさらぬ我かけ
人にみて行て侍ける此夏のやまは
降くれはよる人しれ
春たちて我かつねなるなれは

人乃心浪ふうふもちりくか
さいしす
わきこそ見なれと思ひし梅花
そまきともみえくはる雪乃かれ
業て見ぬる人もあらしふる君
むめ乃袖うふかわつてん
さとなしはなわつてむ梅も
こふまつ人浪きてもこふは
あくる風よもちらすもあまね桜も
わかか衣ひとらやとそん
家宿乃むめみは袖もひくは雪
よるへ月かと見へしまうか

きゝめみもよるうふうらえんかきはもか
とふむそふわ乃息うもこそしめ
そをいはし
梅もおほえはこまれぬかわ袖よ
みほりかうつまいちつをとまをん
身まつまて床るようつわて
よとき人ふも
ふもておるうはあやふ梅の花
つきを見てしるよ又人乃ある
年をへてゐるけふるめのこと
そうわきるは待くるをといりくる
いゝ又乃ともも難面うわりくるまそ
人心うきこそまさる形 春ち八

とまらん宿に雪のくれなん
影しらす
梅かをを吹くる風に鶯よ
んかをそ見し人やとかめむ
ちる花のふるくは那き山まかりなん
むめみむむつきあはとはなれ
まき鶯し雪はふりてしるよ
かかの乃をようくひすの鳴
谷さえこいまたすくぬ鶯の
なく声わかき人のすさめぬ
うくひすの啼つる声にさそはれて
をち乃もとめてわかれはまゐる
花はまさもまつはさくらに鶯の

なく一声をきくとおもはん
君かため山田乃澤にゑくつむと
ぬれにし袖はいつもかはかす
あひ志りて侍りける人のもとにまかり
けるに侍りける梅乃木侍りけるを
咲なむ時はしらすをとこせんと
いひけるを書つけ侍りける
朱雀院兵部卿のみこ
梅のかをいはは風になかめぬるし世
ふるめし人みなとつまもとぬ
かへし　　中納言長谷雄卿
春雨にいつよりむめやにほふらん
わか見る枝もちりもえこす

ちのりこすみつゝおそわかてよく
める　　読人不知
むめがゝも数てふへよこゝろ乃
かわてつてふくうくひす乃辞
ことよひすこ侍るゝ人乃家のまへ
なる柳を田かやつまて
三つ子
いもが家乃きひ入よりてる青柳
今やなくらんうくひすの辞よ
松乃もとよこ狩りまと侍てもを
見やりて　　坂上是則
ふる見とわともいふ乃松の陰よおそし
うつ須にもをよおりおこそれ

藤原雅正
花乃色ハちらしぬ乃いつわ赤くよ
常よそへ松乃ことわなかりけれ
そ梅のちるを見て
みつね
ひるこをいふへても見の花
香そこことくよにかそさわくる
これもまとあして隔こえく
くるゝへよ梅むよ雪のふりつゝわ
きえなと　貫之
ふる雪いつもきえてむ梅花
ちるよまとすおわてきん
息娟涕悲のまやのきへよそ株

をうへて侍けるを三とせそれ
の後も咲なとしける女とも
その枝をおりてこすのうちより
さしいたしといひいれて侍ける
春ことに咲るさかりはあるへきもなれし
ことしをもまつかひあるすとそみる
そしめそし宰相に成て侍ける年なむ

後撰和歌集巻第二

春哥中

としおいて後梅をうへてあくる年の春思ふ所ありて

菅原扶幹朝臣

うへし時花みんとしも思はぬに
咲ちるみれはよはひ老にけり

はやのまへに行のある所にやとり侍て

藤原伊衡朝臣

行とく東床にもし営滾
ふく捍まけハ佃ぬをもまきす

やまとのふるの山をまかるとて

僧正遍昭

石上ふるの山辺乃さくら花
うへけむ時をしる人そなき
花山にて道俗さけたうへ
けるおりに　素性法師
山守ハいはゞいはなむ高砂乃
おのへ乃桜おりてかざさむ
たゝし猶まさくらをおりて
ともへさみつゝいわくれしたき
よみ人しらす
桜色ハひとしき枝なれと
ふるさと見まゝハふくもさかなくよ
返し　伊勢

見ぬ人乃形見かてらハおらさりき
身になそらへる花にしあれハ
桜の花をよめる
よみ人しらす
吹風をなこし乃山み桜花
のとけくそ見るちらしと思へハ
前栽に竹乃中に桜みさきたる
を見て　坂上是則
さくら花けふよく見てん呉竹の
一よの程にちりもこそすれ
たいしらす　よみ人不知
桜花にほふともなく春くれハ
なとかなけき乃志けりのみする
貞観御時弓乃わさつかうまつり

〃〃〃の
河原左大臣
世をふかくて宿にとふもいとぬ佳人
うこめにそよふに風乃こぬ乃に
家よわ庭を添にまつる時前栽の
さくらのもとのゆひつけ侍ける
菅原太大臣
桜むもぬしをさこぬもの春しらて
かをるこ手し風にことつていせた
をこ乃心をいと
青柳みらとよわいへて織りを
はるし乃山乃うくらすきつる
もの数をこて花この雨旅恒
あいの思ひいてしうつろふらんをこる物を

無よ志つ化ぬ詠すとかく
順唇をすてよ見人しく
之る唇雲詠すまとふ辞すゝ
かちくし咲とけこの花風
朱雀院の桜乃雪見にすまと延喜院
の詠侍けれ乃見るやうしもあしまう物
をあと花をしをおもひいてく
大将御息所
咲を手このふつかそ桜花ふ
人はてよやいまむと思けし
うつ志つ手よろひとしもち
春くきい木りくかおほき名月よ
おほつふくしむつけまして

たちわたる霞のころも山ふかみ
見ゆるそくらみさもひとを
大空におほふはかりの袖もかな
さくさくら花を風にまかせし
やよひのついたちころにめつらしき
しける
かすみそへて春をまつるこゝろ
世中とて人に見えぬ程
まちるの山にはその作もそこいとゝ
あけきのやまをもやまをもそへしと
いふかき花みにもへをめよいかをかれ
もえわたるまにおはよいもちのさそはれ
大かたのこゝろは衣とも見え見え
女乃もとにつかはしける
藤原師尹朝臣
青柳のいとつれなくも成りつゝ
いかなるすちに思ひよらまし
侍つのころやすみの家にまうてて侍
けるよひとこそのもおもひいつるかあり
とてはおのれにおもひかはしはれける
山里に殺にまうてる桜を
よほふ盛もすきてまかりきにけれ
返し
みわひこき花の香もしれける
うへてみるまん人のつらさ
小貳におくりける

藤原綱忠朝臣

時しもあれ花の盛につらけれは
思はぬ山に入やしなまし
この歌は思はぬ山の吉野のこ
花さかりけるをとふらん
かはしす　貴道か風
また此歌むかしよりあまた頌とも
あし乃ゑらとなき、在つもすきの
寛平御時花のこと宴よみそこ
をすといふ心をよみてたてまつれと
おほせられし名は　藤原興風

山風の花の香かとふ麓には
春の霞そほたしなりける
影しけす　よみ人しらす
さくら雨乃やうにふわふる人いかにも　これ
桜あはれしく花をこそ思へ
京極のみやすむ所をまつり侍る
春宮にさふらひて雲井に成りは
わの心みちそふるなるへし
よいふ
ねしかぬを見あひてあはぬ春のよの
ゆめ
夢をうつゝになすよしもかな　ふ
思ひわくる事そもとよめる

行幸あるへしときゝてしきう
すくへくわてうしてつかはすとて
さくらさくえ乃志たにさすよ侍従侍ら
わか君乃さくらみるといふ手とも
ちらぬ深みも露なきそてもおもふらん
云侍りける人乃もとより花をこふ
とて
御覧せよ
年をへてむ乃ふよわまいとて
いとしあらなるゝ名をやちらさん
よふこゝろ出きて陳のもとに送
侍りける　春道つらね
わかやとみ華のちるよいふにとわ

よふひあかて天もこゑくよ
主生忠岑かた近のつかひの使にて
まてふたこをさせて侍りけるつゐ
ても我らしみて侍りける
返事よ　きのはし梅よ
かわぬとていふくに使うちるの
ふるよやまて
物へきふしなくよ

後撰和歌集巻第三

春哥下

贈太政大臣にあひわかれて後ある所
まそしり乃こゝちをかきてつかはし
ける　　　藤原顕忠朝臣母

常もなくちる桜はむかしにて
わかれりとつ乃あすもみえ哉

桜のもとのかめにさせりけるか
ちりくるを見て中務につかはしける　　貫之

ひさしかれあたにちるなと桜花
かめにさせれとうつろひにけり

返し

千世ふへきかめにさせれと桜
とまらし事は常にやはあらぬ
なかつかさ　　よみ人しらす

散ぬへき花の限はをしなへて
いつれともなくおしき春哉

細光朝臣とまかりに侍けるに桜
乃いたくちりけれはいひつかはし
ける　　いせ

垣こしに散くる花を見るよりは
根こめに風の吹もこさなん
よみ人しらす

さちみり乃春のき思ひはさやまてを

人乃心は秋やふかくなりし
かりし寸
よそにてもむかし見るこそは涙を
なかく
ころもはうとまきのつゆそよ
はし梅まて
風をふきまちてそ花の散らぬ乃
いつしかようつみふかうまく
あはれなる流にすこし侍るめつ
まくにおもかけ侍れは庭にある
葉のむすひをつこていひつくしける
よこゝ人しもち
あはれにすこし猶の舞のおほかれし侍
きやとる人やあるとて侍るに

毎いまつは
山寺に霞をわけてちる花哉
宿とやよそ乃人そ見るらん
吹風乃さそふ物とはしらなから
ちりまぬるをも乃しあそ立しき
清原ふかやぬ
うちはへて春はさはかりのとけきを
花乃心や何いそくらむ
つゆをそそこついしくるめなかに
ちのもとよわ桜のむひいとおもし
ろかりける枝をおりてこれそこのむねよ
見くくへよとてくれしを
こわつきみ
あかね乃なけちはいきもしきてふくよ

はる華をくらべてもこゝん
ちくのみこそいふかたやうなきもあり
て常に物思ひなる人にてあんなる
春乃池乃ほとりにて
よろこ人 ふむ
さる乃りみち義にていも濃瑳にハ
柳乃まゆそうつゝみしける
春みな萬よこそれむかしこころなる
かくふかくちりてよるをやいつくしてぬ
花乃とまいもあわと見るへく
近衛御時殿上のをのこともの中よ
めしてあけゝ給てをのくうたよまさせし
ける次よ 凡河内躬恒

うき路とも老もくれぬけるかちつ
むかしのおもていふもつへきある
こいしゝすよろんひとしゝす
一ともよりとこなる春のあはれふか
みることひ花を見むとこのあや
華のもとよそしゝれこれ程もなく
ちるらむなとやなるつゐてよ
貫之
あくまきそ咲てゆきまをぬきま衣よ
きすゐるたわ濃花よ了飛くる
さるむ見よ出るわくるを見つけ
て父をつゝしかけるその辺す
もあゝわくれいあくるなのしハ眺らの辺
すとこひよまうて来へわくれいい

ひさしかりける　よみ人しらす

もち露ちかふかしみし業平遊へは
あはしめそしけるやとみやしを
男みもとよわひのめをこせて侍りけれは
春日をす若乃うらしのふのうとけて
実しおもそく家もふのまむ
こいしす　いせ

常よ月をあひの人ちちるまてはも
わか物よしてむは見えてまし

言とらのみこ通義郷長の女に
すみ侍りけるを清室乃めしてゐ院
よそふりけれは、えあふまする侍り
きわれは、あくる年のも桜の枝にさして
みそきしよきし哉をかける　言とよみみこ

花のさくは雪ちるかしらしみし人乃
きら流乃こころうつろはれけれ

月のおもしろかりける夜花をみて
源さねあきら

あたらよ乃月と花とを同しくは
心しれらん人にみせはや

あふみのやといふ所にて
つかはしける　橘公平女

老人きえても おもしらん蛙鳴
あふ浪井とみ山かけのもむ
きさけのふち毎月あて後も時くいふ

家に敦忠朝臣みまかりてのちひさしくなりて
桜の花のちりかゝりけるおりに木のもとに（まうでて）
侍りけるは家の人のいひをこせて侍る
よみ人しらす
今よりは風にまかせむ桜花
散木のもとに君とまりけり
返し　敦忠朝臣
風にしも何かまかせむ桜花
にほひあかぬにちるはうかりき
桜川といふ所ありときゝて
貫之
つねよりも春へになれは桜川
波乃花こそまなくよすらめ

前栽に山吹ある所にて
恵慶朝臣
わか来るひとへ衣は紫乃
八重濃いろもおとろへにけり
たいしらす　在原元方
一年にふたゝひさかぬ花なれは
むへちることを人はいひけり
寛平御時桜乃花の宴ありけるに
雨の降れは　藤原敏行朝臣
春雨乃花濃枝よりなかれこは
なほこそぬれめ香もやうつると
いつとみしくまわかるゝに海せり

題しらす　　読人不知

ちるまさにもみえぬ住の江の
そこも緑りにあそふなる松

ともとも花のもとにて酔へよりて
　　　　典侍よるかの朝臣

春くれは花見むとおもふ心こそ
野へのかすみとゝもにたちけれ

あひしれりける人の久しうまうて
こさりけれは花の盛につかはしける
　　　　よみ人しらす

我をこそ見まうかるらめ春霞
華につけても立よらぬかな

返し　　源清蔭朝臣

ちよのぬちに霞残りのまれ
花のあるわたりのもとにちらさん

やまさくらをおりておくり侍とて
　　　　伊勢

君見よとゝつねておれる山桜（さくら花イ）
ふりにし色と思はさらなん

宮つかへしける女の石上といふ所に
すみて京乃ともたちのもとに
つかはしける　　よみ人しらす

神さひてふりにし里に住人は
都ににほふ花をたに見す

法師にならんの心ありける人やまと
まかりて程久しく侍て後あひしる

て侍りける人のもとよりはにるいはま
うむはさきつわやといひて侍を
まちて
三芳野よしの乃山の桜も
さしく雲とのみなまらひて
亭子院歌合のうた
山さくら咲ぬる時はつねよりも
峯のしら雲たちまさりけり
山桜をよみて　貫之
白雲とみえつる物をさくら花
けふはちるとやをしむことよなさる
たいしらす　よみ人しらす
日やとのはけともいのちも歳乃む

ちよわくとも春みよおもふふ
むかしまてもとめぬよしの川
けふようつろふさきし乃山にて
人乃心新しくふわ久れ数々の歌
きゝしふるをこれみるとて出し侍る
志のりよ吻て蛛乃たにもとも
しく幅ふやかふきゝ乃また
法の許み花乃さくわよみちまへ
わかるよ　僧正遍昭
おなじつまいふとよみけるそ侍
ことよ乃佛よむそしま侍る
さいしゝよりとしゝ寸
あるべき乃をことゝへかうき枝折そふよ

千年をつみてしきける藤
やよひのしもの十日許に三条右
大臣兼輔朝臣の家にまかりわたりて
侍けるに藤の花さけるやり
水のほとりにてかれこれおほみき
たうへけるついてに
三条右大臣
かきりなき名におふ藤の花なれは
そこひもしらぬ色のふかさか
兼輔朝臣
いろふかくにほひしことは藤なみの
たちもかへらて君とまれとか
つらゆき
さほさせとふかさもしらぬ藤
なれは色をも人もしらしとそ思ふ
ことかくてしあそひ物語
なとして侍けるほとに夜更にけれ
はまかりとゝまりて人のはしけるに
三条右大臣
昨日見し花のかほとてけさみれは
ねてこそさらに色まさりけれ
兼輔朝臣
一夜のみねてしかへらは藤の花
心とけたる色みせんやは
貫之
あさほらけ下ゆくみつは浅けれと

かくてむ月乃ころハ見んとなる
大さうすよき人さうしもち
うくひす乃こゑよりそふむ柳
吹ふみへわたる春の山かせ
桜の花乃ちるを見て
見つね
いつ乃まに散はてぬらん桜花
おもかけよのこゝろへをゝきつゝ
見つこのみこゝ乃花見侍りける所よて
源中宣朝臣
散る事のうきもわすれてあはれてふ
ことをさくらにやとしつるかな

桜乃ちるをミて
よみ人しらす
さくらこきこゝろ衣よなれは
すくる月日もおしけくもなし
延長まうる月あかる夜司召乃
ころ申文よそへて左大臣家よ
つかはしける
貫之
あまりさへありてゆくへき年なれは
春よふかくもすあふよしもかな
返し
左大臣
常よりものとけかるへき春なれは
光に人のあはさらめやは
つかまつりてきこえけるひかる所よ
さふらひける侍てひさしくまうて

きあそすて年のへかよくかはれ
れたるやとひのはこもてよつ
かはしける　藤原雅正

君こすて年ハ暮にき立かへる
春さへけふに成にけるかな

ともにこそ花をも見んと待人の
こぬものゆゑにおしき春かな

返し　貫之

君まつに思ひて中し宿のむ
いそかれし時もむかしすなりける
八重葎心の中にふかゝれは
花見にゆきも出てらもせす

いゝしす　読人しらす

おしめとも春の限りのけふの又
夕暮にさへなりにけるかな

みつね

行さきを惜しみし春のあすよりは
来し方にも成ぬへきかな

やよひの晦日男のうへ
りさまに成もやするとたのこを
ちるのまにまつハかすみなりける

よみひとしらす

花しあらハ何かハ春のおしからん
くるともしゐりハ歎かさらまし

見つね

暮てまたあすとはなきさきのはるを
花乃かけにそけふはくらさん
三月のつこもりのひひさしう
まうてこぬよしいひて侍る文
乃おくにかきつけ侍りける
つらゆき
またもこむ時そとおもへと頼まれぬ
わか身にしあれはおしき春かな
男のもとにかくておもふし年へにけん
女のかはりによめる

後撰和歌集巻第四

夏歌

題しらす　よみ人しらす
けふよりは夏の衣になりぬれと
きる人さへはかはらさりけり
卯花のさける垣ねの月清み
いねすきけとやなくほとゝきす
卯月ころわ女のもとの住侍る
ほちく侍てうちふしきゝて
こゝにしてんと侍るよあはとなく
なかはたえけれは
郭公きゝねる夜はちかなゝし

まちきこよのゝ声乃おとこゝぬ
返し
郭公こゑまつ程はとはれして
しのりよ鳴をまちぬなるらん
物いはかへし待くる人乃つま
ふく待はその宿乃垣ねの
うの花をおりてしひへて待くる
うらめしき君か垣ね乃卯の花を
うしと見つゝも猶そのまれ
返し
うき物と思ひさためふかうのはな
さけるかきねにまちてそきし

うの花のまよひめるかなまて
時わかぬ雪とそ見るてよ
垣ねもたゝまかふうの花
おほちのとみへひまてこぬるす
をうしつけすとも
白妙の白ふるまねのうの花
うくもきそしくる人みちまさ
時わかぬ月の雪とも見るのてよ
きねのまてさける卯の花
なき俤ぬいつものりも郭公
猶うのはなのかけにきたりし
卯月許乃月にもしらかりける
長人よつかしける

あひ見しもまた見ぬ恋もほとゝきす
月になく夜そよにゝさりける
め乃もとよりつかはしける
あはと乃こきいはゝたてし郭公（なとゝ乃山路）
まいよきこえて逢すもかな
ふいし寸　伊勢
木のくれてさ月待とも時鳥
そら○なしいは枝うつりせよ
在原乃むねやな乃命婦すみ侍
ける男人乃てようつり侍よ
まる文乃としきつけるよつけ
てつかはしける
良峯義方朝臣

いにしへの昔乃岩根のきよき（？）
さきをわたる形見なりけれ
賀茂乃まつり乃物見侍ける
女乃車よいひ入て侍ける
よみ人しらす
ゆきかへるやそうち人乃玉かつら
かけてそたのむあふひてふ名を
返し
ゆふたすきかけてもいふなあた人の
あふひてふ名はみそきにそせし
ふいし寸
このころは五月雨ちかみほとゝきす
おもひみたれてなかぬ日そなき

まつ人は誰ならなくに郭公
思ひ乃ほかになかはうからん
よほつちまてしもおもかゆる
夏は緑乃色のみしけきは
朱雀院乃春宮にておはし
ましける時たちはきとも月
許出書所によりわてさけふ
とうへてこれはまつによを
数よ　大春日師範
五月雨に春宮蔵人来る時を
深くともきすをや常よせむ
夏衣ふるや男にこそひく

たきゝて　藤原道輔朝臣
見しほと乃夜の空まては高砂の
峰乃松風ふくかときく
おなし心を思ひて
足引乃山下水の行きかよひ
ことの○あきへなかるへしや
ふ送てに　藤原言経朝臣
夏乃よはあふさきのえにして来む
ちわかぬたふれに明ぬる
みぶのたゞみね
夏はよるもちかふる物は夏のよの
暁かた乃わかれなりけり

あひしりて侍りける中みたれも
ことも心さしはなれなかりつるに
ありてえあはさりけれは
よみ人しらす
よそなから思ひしよりも夏の夜の
見はてぬ夢そはかなかりける
夏の夜しはし物語して侍りよ
りける人のもとに又のあし
つかはしける　伊勢
二声ときくとはなしに郭公
夜ふかくめをもさましつるかな
人のもとにつかはしける
藤原安国
逢と見し夢にならひて夏の日の
くれかたきをもなけきつるかな
よみ人しらす
うとまるゝ心しなくは郭公
あかぬなかにけさはなからまし
思ふ侍りける比郭公をきゝて
おりはへて音をのみそ鳴郭公
しけきなけきの枝ことにゐて
卯月許に遠き国へまかりくたら
んとするにほとゝきすをきゝて
時るきけち旅とやなきわたる
ふるさとのおしき声を
こゝしもち
ひとりゐて物思ふわれを郭公
こゝにしもなくはあるらし

むかしをかけつる程乃時鳥
こゑ二声もなきそこしかれ
五月許におもふゆめにつけしける
数ならぬわか身は山道の郭公
木の葉かくれの声はきゝゆや
いらへしもち
とこ夜に鳴ても南なときす
志のまにこふ山にはほのめかしせを
ふすかしの先を俟しき郭公
あかさきもちてしぬに鳴る声なれは
三条太大臣かねに侍ける時志
のひに通ふ侍るをうへの
そのこともなき人をわ五月の
ふり雨こしやみて月おほろ

なかくまにさけいるへんとそ
をし人て侍るを我かねはれ
いみて侍りきわ侍きいふち
やもらひてあるしいをなと
いひすま侍りきい
あるしの女
五月雨に濡くもる月なれ
もやにみえし雲まつ
めこもて侍る人に田ふ侍
てもしけるよみひとしらす
かきふよわこ志めゆひし梅子の
をの乃盛を人におしまする
影ふたい

あしひき乃山郭公うちはへて
誰かまさると音を乃みそ鳴

五月ある日みこゝひさしく語
侍ける女乃もとにつかはしけ
れは　女

つれ〳〵となかむるころの涙時雨
とふにつけてそ音はなかれける

題しらす

きゝぬれはむかしありける郭公
なき音をなくしそふ拂中や
猶しして妻こひすらし郭公
神なひ山にさよふけて鳴

夜乃長に恋しき人乃なとめは
ちふはそらもむすきつるへなかりける
女乃物見によまかりかへりけるに
と車にいりよききわきするに
物ふといひおもしてはよつかはしける

いせ

郭公ちつかなる音をきゝ初て
あしぬもそのことおほゆれて
五月ころつ侍けるにおもひける
侍て　よみ人しらす

さみたれのつゝける年乃なかめには
物おもひあへる我そ侘しき

やよいとしのひて物いひてへ
りて

聞る一声にあくる夜乃よ涙
暁ゝやあふこそなつるらん
大いしす
うちはへて声をつくす空蝉の
むなしき恋もあはするよ
八重葎しけき宿には夜虫乃
こゑよりほかにつゆかとふし
空蝉乃声きくからに物そ思
ふ我もむなしき世にすめは
つゆもあまる夜乃草はに置露
気とふのむをそみちふを
人のもとにつかはしける
藤原師尹朝臣

いろよきん小倉乃山乃深ときす
おちつなしと声を乃こすなる
こいきては　読人しらす
郭公暁ころみひとこゑそ
うきふ世乃中をるすなかりけり
人志れすこそ恋しめし暁の梅るは
せむ咲ぬへき時も来にけり
わか宿乃梅はうへしあまたには
花よそらなる世とよそへはさえ
とこ夜みもをへるれはすあには
まくは月はもらしかなふん
床夜よ思ひそめしは人志れぬ
こゝ緒乃ほとはさきにみへなん

返し

ことゝいへきこえも落なも軒まれし
やうとおもてしこ数よふしやうちう

師尹朝臣乃またわらはにて侍
ける時とこ夏乃花をおりて
もちて侍けれはこれにつけて
内侍のかみの方よりおくり侍ける

太政大臣

なてしこはいつれともなく匂とも
をくれてさくは哀なりけり
影さへに　よそに人ふむ
梅乃花ちる方より成まかりか
かきつ梅をくなりにけり

よひのまもはかなくみゆる夏夜
はくるはまの程ふかうへく
夏乃よの月はおほかるゝぬまと
あしひきの山をこころもちよせつる
かきゝき涙常とひにて明けれは
夏乃夜ゝわかる月をかくあらゝ
嶺ちかき夏をして梅遊をや郭公
ふく鐘のうちかはんとちこそすれ
桂のみこ乃蛍をとらへてといひ侍
けれはわらは乃かさみの袖よつゝみて
つゝめともかくれぬもの夏虫の
身よりあまれる思ひなりけり
よみしらす
天川ふなまちゝゝりし夏乃夜は

ふりさけ月乃よるともおもふらし
月にかつらふるあかてまろわ
あわきもせてしまてこぬよし
いらてよ乃おくるよ
男つく
むもちり郭公きへいぬるまてし
君よもゆれなかよ八るれ
返し　菅原雅正
花ちるみるをとも手をも清らよ
物うるゐをもくにやハわ
影しにより人寸
ふつ虫乃子をたき捨てむ
こゑともまちゑみん人ゆとるみ

夜更月おもしろく侍けるよ
今夜かく詠る袖乃露なれは
月乃霜をや秋と見つらむ
こよひ月をてへしては河原によ
まいりて月乃なかきをよみて
賀茂川乃水底すみて照月を
りて見むとや夜をくるらむ
みな月つこもりころ年
七夕はあまの河原をなかへり
後乃こよひをも御板よいとさら

後撰和歌集巻第五

秋歌上

是貞乃みこの家乃歌合に

よみ人しらす

俄にも風乃すゝしく成ぬるか
秋たつ日とはむへもいひけり

題しらす

うちつけに物そかなしき木の葉ちる
秋乃はしめをけふそと思へは

物おもひ侍ける比妹ちり人につかはしける

いつのまに夏はつきぬし秋風を
人よりかつきゝぬらむすかなしも

思ふ事侍けるころ

いとしく物思ふ宿の荻のはに
秋とつけつる風のわひしさ

題しらす

あき風乃うちふきそむる夕暮は
そらに心佗しかりける

大江千里

露わけし袂ほすまもなき物を
なと秋風のまたき吹らむ

女乃もとより文月許にいひをこせて侍ける
よみ人しらす

秋萩をいろとる風乃吹ぬれは
人乃心もうたかはれけり

返し　在原業平朝臣

桜さきぬなどいふところ風もあはぬども
いひて狩し草葉ふかくゐて
源業朝臣時々まかり通ひける
時よみし月のかつらにちかりけるに
ぬきのみちまてよせりてくて
しててといはつらしてけれは

渚院

あふりは七夕つめにひとしくて
いそぬよかもゝはいへはあそはる
たいし玉寸　よこにもしうす
天川かくらんこともおもほゆる
えぬかりきとたにふもみちる
七月七日よ夕くはまてこもとひ
て待く進は雨わかれいまて

こそ　源のちかまさ

白

ふかてしら滝をわくかて川
こよひはよそにこえんとや見ん

返し　読人不知

ふるをわかあをせきてもち成ぬとも
あふせのとかくる舟はちかしやは
ちぬかみりよめのもとよつかし
ける　菅原為三

織女まつることをかくれはかくれ川
このかくれは渡るをもかし
かれはくる男の七日の夜まてきくる
くれは逢よふそて待ける

読人しらす

ひこ星のまたれに逢ふあらこ夜は

うちそへども露をかりくかり
なぬか人乃もとより返すとて
こよひかさんといひをこせて侍れ
恋しくてあまそ舟とおもふ夕暮を
七夕にかしもかくやあるらし
返し
たなひなきねどはなす成ぬべき
いふはつめ人めやそもる
題しらず
天川流て恋はうくこそある
あきまと思ふをまやくるむ
むつらぬものかはたまの
年乃わたりて一夜乃こ
秋のよみんもしるく七夕懐
ある数こよひは明すもかつ南
契りきん志のひふ今は返てん
年乃いくかよわくるものを
なぬかのみよは鈔後義人はきく
藤原顕忠朝臣
あふすの今夜こふは織女は
おとはやきつなんこひはまさりて
七日乃ひ　よみ人しらす
七夕は天乃かはらを今あまさへ
をさらく人乃つまなからん
七夕をよめ歌
てほとをきわかはなかれとも
天かみてしは年みこそまて

瀬は岩こえ浪乃うちかほく
牽乃七日乃秋きるをしをまつ
紀友則
きのふよりやてのはらはあをきなん
ちこ井水もふくてわかなん
よみ人しらず
は天ふかてこふるたなはたの
涙なるらし牽乃しら露
てらそて秋白波にふなわたし
して渡り来ぬ待よくらしこ
牽くきは川霧たちわたる天川
はの上のてこふる日乃おほさき
天川あひしきせなの渡りぬる

瀧はなたつは袖はぬまつて
七夕秋年といひし君乃川
空立わたりいそきみくまし南
凡河内躬恒
牽乃よる秋なゆきかなを七夕そ
うそぬまもまほおもふへなれ
七月八日乃あしたに
菅輔昭
七夕秋のへふあしたの天の川
舟もよそぬ渡もこそなん
おほしんむを思ひて
あまの戸明て行やすらん七夕そ
はらぬかの空をこひ侍る

おもふ事侍て よめる 人しらす

秋風乃ふけゆくさまの侘しさを
よそにきゝてもなれぬ物かは

さいしち

まつ虫乃初音をさそふ秋風は
音羽山よりふきそめにけり

業平朝臣

ゆく螢雲乃上まていぬへくは
あき風吹とかりにつけこせ

よみ人しらす

秋風に草葉もそよにふきぬなり
ほのきこえつるひくらし乃聲

はし越文

蜩乃こゑきくやまは根をちかみや
なきつるなへに入日さすらん

よみ人しらす

ひくらし秋葉すゝよまて虫の
名なる乃人を思ふに似たれ
んあかてなきもしつるひくらし乃
はしめも物乃あきてうかれ
秋風乃ふくよひきうけつくす
草みなことの葉をしかわ
なことく物や悲しきなやみき
草乃やとりに悲しいなく
こゑといひし猿やとぬる松の野よ
うれしむし乃音のなしき

秋乃野よきやとる人もおもほえす
誰をまつむしこゝら鳴くらん
秋風みやはさひしき野をとむ
侘しき許よ松むしそなく
藤原元善朝臣
猶くまは聲もとよ虫乃なわこ
こゝろ乃あやをは誰かきるらん
よみ人しらす
風さむミ鳴まつ虫の涙こそ
草はふ色とる露とをくらめ
あきゝもの乃さひしく松は山ちかう
浪くちうへてをとをきこゆる
是貞乃みこ乃家の哥合よ

立下

壬生忠岑
松乃音よ風乃しらへをまかせては
瀧田姫こそ秋はひくらめ
秋大将かうつまさのかたなる
家よ侍けるおきな乃むすめよ
をとこしてつかはしける
左大臣
山里乃物さひしきは荻のはの
なひくことよそ思ひやらるゝ
題しらす　小野道風朝臣
穂に出ぬはいかてとはまし花すゝき
身を秋風よすてやはててん
みかの男よ物いひける女みおひ

とかはつきにはくれいなひとりやはいい
ひつかしける　よみ人しらす
あけくれもたのこゝろをうつせて
袖そほつ涙とそなかぬる
返し
いもてしおふる山田乃ひつちおそ
天まもしもとかゝる人もなし
こいしす　菅原忠文
草乃いとにぬく白玉と見つるは
秋のむすへる露にそありける

後撰和歌集巻第六
秋哥中
延喜御時に秋歌めしありけれは
奉りける　き乃つらゆき
秋霧乃たちぬる時はくらふ山
おほつかなくそ見えわたりける
萩見ると出にしものを秋の乃
きりにまよひてけふはくらしつ
寛平御時きさいの宮乃歌合に
読人しらす
浦ちかくたつ秋霧はもしほやく
烟と乃みそ見えわたりける
おなし御時乃女郎花合に

萩原兼風

おもふことかなはぬをことにへ
いそむなしくも花くもらん
よみ人しらす

秋乃野露にをかるゝ女郎花
はらふ人なミぬれつゝやふる

女郎花はな乃心ハあたなれハ
秋にのみこそあひわたりけれ

たち乃ふくまてしきとよ侍ける
よそんていハ乃流かこゝにまいりける
返すよ　を清之衣

夕月よぬきまつし袖よいとしく
露つきそふ涙秋の悲しさ

御返し　延喜御製

大方も秋ハ悲しき時なれと
つゆけかるらん袖をしそ思

亭子院乃清前のむかし乃いとおもし
ろく紅露のをくる致めして見せ
させ給て　清寧御製　寛平

白露乃かはるも何のおしけれん
ありて乃後もやゝうき物を

返し　いせ

うへてみし君かしめゆふ花なれハ
玉と見えてやつゆもをくらん

大輔か後涼殿に侍けるに藤つほ
よりをみなへしをおりてつかハ
しける

大大臣 九条

おりて見る袖さへぬるゝ女郎花
露けき物と今やしるらむ

返し 大輔

万世にかゝらん露を女郎花
何思ふとかまたきぬるらん

又 右大臣

をきあかす露のよなよなへにけれは
またきぬるとも思はさりけり

返し 大輔

今いくやうちとけぬへき白露の
心をくまて夜をやへぬる

あひしりて侍りける女のあたな
たちて侍りけれは久しくとはす
侍りけり八月許に女のもと
よりなとかいとつれなきといひ
をこせて侍りけれは

よみ人しらす

白露はうへはつれなくおきゐつゝ
萩の下葉の色をこそ見れ

返し 伊勢

いかなれは草をもあらなくに
枝くる風にうつろひしせむ

男のもとにつかはしける

よみ人しらす

人をいそくするともなをなすも
こなたへつ越ゆくなる秋もしらるゝ

人乃もとにおもふ心ハいとはまに
をつかハしけれハ返事すとて思
草をくハへて　中宮宣旨
花もなき所に出るものもなき露
草の身なれハ草をこそ摘め
べし　いせ
露もよるうへにおきてかは見る
まねく尾花にも人やとふると
影ふかき　読人しらす
秋乃よをいつとに乃こおき明す
露をわか涙うへにまかせるる
大ふよ玉しく露も今よりハ
心してこそ見れ数へかわもすゝき

右大臣
露ふかくぬかなと思へと秋のよを
つくこそあかもおきぬなからしよ
秋乃こころわかぬあるかなとも乃
あまくにすのうちよ侍けるに男
ともの もとをいひいれて侍けれハ
来ハうちよわ　よみ人しらす
志らす露乃おくよりあまくハ秋萩すれは
野乃いろくあわとしらん
八月なかの十日許に南乃方より
くるよ女郎花かわよ萩原なる
ここをのへよ出して　きそくの给
たつかハしける　左大臣
萩さてハ月も待へし　桃ことに下

句やそしと思ひてさらしなん
これは読人しらす
秋乃田かりほの庵乃句みえて
さける秋萩は見えまをみすぬも
秋のよ露まとろ手すみこあすみ
姿ちといつそたのうちわくり
萩の花をおりて人につけよとて
時雨ふりふりなは人に見せもあへす
ちらはちるとも おしみおれる秋萩
秋の歌とて 貫之
行かへりおりてかさゝむあさな〳〵
鹿たちならし野への秋萩

宗于朝臣
わか宿乃庭乃秋萩ちりぬめり
のちみむ人やくやしと思はむ
よみ人しらす
白露乃をかまくおしき秋萩を
おりてはさらに我やかくさん
年乃つもりまるすたれ
かくつみてよ
貫之
秋萩乃色つく秋をいたつらに
あまたかそへて老そしにける
歌不知 天智天皇御製
秋濃田乃かりほ濃庵乃苫をあらみ
わか衣ては露にぬれつつ

読人しらす

わか袖に露そをくなる天の河
雲乃しからみ波やこすらん

秋萩の枝もとををになりゆくは
志ら露をもくをけハなりけり

わかやとのおはなかうへの志ら露を
けたすて玉にぬくものにもか

延喜御時歌めしけれは

貫之

さ鹿しのちらす小野乃秋萩に
をける志ら露我もけぬへし

秋乃のゝ草ハいとゝも見えなくに
をく志ら露を玉とぬくらん

文屋朝康

白露に風のふきしく秋の野は
つらぬきとめぬ玉そちりける

題しらす

秋乃野にをく白露をけさ見れは
玉やしけるとおとろかれつゝ

題しらす　よみ人しらす

をくからに千草の色になるものを
志ら露とのみ人のいふらん

白玉の秋の木の葉にやとれると
見つるは露のはかるなりけり

秋の野に置志ら露の消えさらハ
玉にぬきてもかけて見まし

唐衣袖くつるまてをく露は
わか身を秋の野とや見るらん

大空はわか袖ひとつにあらなくに
かなしく露やわきておくらん
袖にのみおく露袖よりけにぞ
よみける時乃流るかな
旅乃そらにとそよめる
思ひて
秋乃野ゝ草もくらぬをわか袖の
ものおもふ時に露をおくらん
中ゝやふ
べく世へて後かさへむちわぬ今
形へ乃桃きこえく月夜を
よみ人しらし
旅のよ露月の影そこのまよわ
落ち衣とまよふつゆし

袖に宿る月乃光は秋ことに
こよひをしもぬけとみえつる（るイ）
秋乃よの月はかさぬ雲晴て
ひかりさやかにみるよしもかな
小野美村
猿乃池濱月乃上にて舟遊
桂乃えにまさるやさらん
みつやぬ
松乃うえにうつまる月を詠り
波そてかへとまりもゝそす
帳負乃御子乃家に歌合に
読人しらず
秋乃夜の月の光を清くれや

人乃心乃くまハてらさす

秋の月つねにかく照物ならハ
やミにふる身ハましらさらまし

八月十五夜　藤原雅正

いつとしも月こそぬ秋ハなき物を
わきてこよひのめつらしき哉

よみ人しらす

月影ハおなし光乃秋のよを
わきて見ゆるハ心なりけり

月をみて　紀淑望朝臣

宮こにて秋やよくらん久かたの
月乃かつらもこゝろさそひぬ

思つゝ

衣手ハさむくもあらねと月影を
たまらぬ秋乃雪とこそ見れ

よみ人しらす

てらしつゝことけてとしめなせ
あかす流る月やよとむ心し

秋風に波やたつらんあまの川
わたるせもなく月乃なかるゝ

秋くれハおもふ心ミたれつゝ
まつもみちはとちりまかひける

みつね

涙さへ物思ふ秋乃衣こそ
涙乃川に浪こそたちなれ

よみ人しらす

吹く風にふかきたのみのむなしくは
秋乃心をあさしと思はん
是貞のみこの家乃歌合のうた
秋萩よい人をまつむしの声すなり
われかとゆきていさとふらはん
露をよめる　藤原清正
ぬきとむる秋しなければ白露の
千種におけるたまもかひなし
八月十五夜
秋風にいとゝ更行月かけを
たちなかくしそあまの川霧
延喜比時秋歌めしありけるに
奉りける　忠房

女郎花おほかる秋乃野をさして野へは
つまとわかものなつましきかな
人よもしくもゝ　兼覧王
秋霧み晴るゝいつましくし女郎花
いろよる人やあはんとおもへは
影しずよそ人志てあち
をとなへし草村ことにむきあひ
詠まつ虫乃声はふるよふかき
女郎花にたる人てましを秋乃よ
月乃ひかりを雲かくれつゝ
咲さなへし花盛よあき風の
ふく夕暮を詠よかくしつゝ
つらゆき
白衣かみ乃衣をうつしきをみなへし

さけるほとへよるこゝよひねよゐる
名にしおへはしひてたのまん女郎花
萩乃心に秋そうくとも
躬恒
七夕にかるかしかつこなへし
糸よわかたるよ逢時そなし
よをへしと待し
秋乃野によわもやはすん女郎花
萩花名をたのみて迎ひかけ袖く
をみなへしくゝにもあらぬ松虫を
ともによやとして誰をまつらん
前栽に女郎花を植ゑたるによみて
をさなへて白み露をみる時そ
わか老らくいくやしかりける

すまゐし乃このかみあるし乃前つゝ
をみなへしをおりてあつよし人
みこのかきしよせうとて
三条右大臣
女郎花をるも乃なる取ぬ物なへい
ほつそ君のかさしにもせん
としころ宮乃むすめによせうさし
こよそし侍るをめみさへかる
かるしなといひてゆるさぬあ
ひさなんてなん侍る表
法皇さいせの宮乃をみなへし
をめしたれい奉るをまうて
枇杷大臣
女郎花おりけん枝乃ふしことに
見し君を思ひ出つやきし

返し　伊勢

女郎花折りもをらすもいにしへを
さらにかくへき物ならなくに

後撰和歌集巻第七

秋歌下

題しらす　　読人しらす

葉きる人ふころやいそらなるし
さく雁乃声まぬしらめる

秋風にあひとしあへは花すゝき
いつれともなくほにいてゝまねく

寛平御時きさいの宮の歌合に

在原棟梁

花薄そよともすれは秋風乃
ふくかとそきくひとりぬるよは

題しらす　　よみ人しらす

むすなほに出やあちき草ふれは

あはなゝんといふ名はれなくに
吹風にさそはれつるかかはらぬを
雲ゐにきこゆる
きしかたは思ふ人待る時に
貫之
秋乃夜にかりかも鳴てわたるなる
わかおもふ人乃ことつてやせし
よみ人しらず
秋風に霧とひわけてくる雁の
ちよにかはらぬ声きこゆなり
よみ人しらず
物思ふと月日乃ゆくもしらぬまに
わかこゝろふかめて秋をとつれ
やさとよまつはくるゝついてよ

雁のなきつるなへに唐衣
龍田濃山をもみちしにけり
よみ人しらず
秋風のきそはぬ雁かかはらには
物おもふ人乃ねさめをよそになむ
詠きけと鳴わたるなるやとみ
尾花のまねきすきそなして
りなはさてもしこそ旅なし
くる雁こゝよりわくとふく
雁ことはくれと帰まゝ秋まぬを
箱まゝそしつゝかわと乃こゝ鳴
ひさかたなかりのおもひふくみをの道
かくと乃こ鳴わたる人
人乃わいまよくるとハをすて

ことに

年毎に雲ゐちかくまよはぬかゝみは
こゝ縁つゝるや松をさすらん
やまとに帰りくる時これま
ともまそし よろこ人ふたゝ
てはうわすとやすらさかやかの
松をむへも以縁つきまくか
百猶夥下た近かねよ侍くる
時むさし野に志るむのへよまつかせ
は深よそちるゝりあわてそれよ
おふしつきの乃かねよそしむへよ
乃わて也まそりよか随方をか
へしていひ送侍くる

藤原忠房朝臣

松露野に立野乃錦をきる時そ
心よ乃まて天かこひしき
多いしきす 在原元方
いつ乃ことある野に草も秋は花
さことにに三ろ乃一あかたまわれ
よこひに 維氏
秋乃野に野なしきのこともえゆるは
いろな菓露は深しと思ふよ
秋乃くよいふる庭野にたきつめそ
ちく濃草ゆふ乃ことそえん
はまとをりふて志乃きむ松のよ
うつろんとそしきかいくそ
紀乃友則
許くそこ鳴く野ぬへよ秋露よ

なまとゝせるを麻にあらはむと
よそにひとしてち
浅きけとこゝろ高砂のまつをしよの
ふかくしよ代松にたくへむ
うちそへて隠とする峯の松
ひろとる松乃風ようつるに
初時雨ふりしは山高遠にもおもふなる
いつまて乃くらかも先もこつらん
いもゐひもとくとむすふと龍田
今そ紅葉見れ錦をおりなる
わかそてもそてきへあしいの府なかし
龍田乃山をもこえ出すものて
見る度毎よ秋やもみち成し龍田姫

紅葉ふかむとや山もきやうらん
源宗于朝臣
梓弓入佐乃山は一あきゝ露乃
あはることをやなまそくるらん
をしかともいかにあるすけらん
よみ人しらす
夫とつまといもせの山も秋くれは
あきそめぬる物にそかゝりける
いに詠人 元方
秋すくといろ付山乃もみち葉は
たくひなきいつ露やかゝらん
吉野山をこゆとて ともみつ
かく許もこつるゝ乃こゑしけや

みゆき、龍田乃山といふ所を
詠して寸　読人不知
唐衣たつ田の山乃もみぢ葉は
物思ふ人乃袂なりけり
たつ山をこゆとて　貫之
あし曳山乃やま鳥山守もる山も
もみぢをせさする秋は来にけり
こゝし侍寸
かゝりきゝ龍田の山をりわたり
紅葉ふりしけるときいなりけん
うし衣たつ田の山乃もみぢ葉ゝ
はたものもなき錦なりけり
人くもろともにを俺ひつくる
道に山乃紅葉をこれ見よる侍

くゝまの　忠岑
いく木ともえこそ見わかね秋山乃
紅葉ぶ乃にしきよそにたてれゝ
秋い志て寸　よ見ひとし侍寸
秋風乃うち吹しける山も野も
なへてみしきにをりわへきちる
なとそこに秋かとつむにしかる
龍田乃やまは紅葉ちるよを
あきなかとこふ見なふくよ紅葉を
ちる乃そ秋しふく
貫之
むかつ葛城山乃もみぢ葉ぞ
おもかけに乃こ見えやゝこの
秋霧乃はれしかくもは紅葉なる

おほつかなくて散ぬへてなから
境山をこゆとて　いせいはし
かくふ山やたゝき里しくるゝかと
錦ふかめくろ秋をみてしける
とふりよ信信なる時九月ハか
いせかふか乃菊よわたをきせよ
つかしへわかくれハ又の年しかおり
てかへすとて　いせ
数しらん君かよはひを乃へつゝ
あくふゝ菊み露とちらん
返し　藤原雅正
遐いつも名にてこそ菊乃菊あくそ
むかし乃花あるしやいく吉なくらん

ふか月乃こぬか露乃なくさわよ
久秋を　伊勢
菊乃うへにをきゐるへくハあらなくよ
千年みか秋も露よなすまし
こいきてす　よそ人きても
きくみむむかし月ことよ咲くれハ
ひさしき心杯やきぬらん
名かよしおへる長月ことよ君かえめ
つまよ乃菊きよほへと思よ
かゝみ菊をとうつしうへて
有るをかゝしてきけるきく乃花
うつひふかところ白かつてなき
男乃久しうまてこそかなくれしを
はまかくさ染めへしにおもらん

おもてしをやすき君もこふくは
月影に紅葉のちるを見て
紅葉して見る数くることかは先の月の
あかれの月のつらなる陰
影しらぬ
いくちくさ織なす秋のもみちはにこそ
風に見えくしみしけきふるらん
ふもとさはに錦の山路をこくれ、
をしぬ錦をきぬ人ぞふき、
紅葉をかつつりにしきてて
家にかへると人や見るらむ
題なくて
おもひきていさかきもみち嵐山
こして紅葉ちらんかけ見む

よみ人しらす
山風のふきにまかせて紅葉をは
このもかのもにちらぬへしから
錦のよはに雨ときこえてふりつもる
風にみかえしもこそなかるか
立よりて見るへき人のあれはや
秋の色やしるし錦きて見ん
木のもとに錦をしきぬる袖にもし
雪の林のもみちちりかかる
錦にちる紅葉こそかさねへ
霜にをしくにしきなかなかり
あつま山の花をこそ散らぬ世をすて
嵐のさきに見てまし物哉
もみちの散しく秋の山へこそ

いちてくやしき錦なかりけれ
龍田川色くれなゐに成にけり
山乃もみちそ今は散らし
貫之
いつくは秋よしなれは山ちかき
なくしかのこゑもきこゆなり
よみ人しらず
もみち葉の流るる秋は川ことに
のしきやもと人やみるらん
龍田川秋はみなくもみち葉の流れもしおし
文屋朝康
波わけて見るよしもかなわたつみの
そこのみるめも紅葉ちるやと

藤原おきかせ
木の葉ちるうらに波たつ秋なれは
もみちに花も咲まかひけり
よみ人しらず
わたつみの神にたむくる山姫の
ぬさを人はもみちといひける
貫之
ひくらしの聲もいとなくきこゆるは
秋夕暮になれはなりけり
讀人しらず
風の音の限と秋やせめつらん
吹くることに聲の侘しき
もみち葉をたましまける庵の露

月乃影こそうつるへらなれ

あひしれて侍りける男みつかはし
ける侍りけるはあまつ月よにつかは
しける　右近

大かたの秋乃空たに侘しきに
物思ひそふる君にもあるかな

かへし　よみひとしらす

秋ことく物おもひくらし白露の
起ゐつゝよなきはらしつゝ

あひしれて侍りける人乃ちかくまて
こす成にけれは男のおやきて
なにゝかはとへとやをし男とよ
てはよまそてまいりけれは

平伊望朝臣

松ふつことよりよのさきく白露の
うつゝ乃をよかゝるなるらん
これよりける男乃秋とへわかるゝよ
むかし承香殿のあこき
思すみける松しもまれは少ゆるに
かりや春をを人のうつろし
みせふとるこきゝさいてとをせのも
とよつかはして

源とゝのふ

君こふる涙はぬれてわかそてを
秋乃もみちといつまとさきしけれ

かへし　よみひとしらす

てる月み秋しもことよるやゝよい

ちる露ふかきをよろこも見よとゝ
なか宮乃御傍に菊植給ひ下思
てなよびし侍りける事をとゞめて
うきつけて御傍につかへし侍る
ふとかる下いも地と咸なりん
おなし歎乃枝にこそあれ
秋やこなる草かれ花物陰
侍ありさわ乃なきやゐわ侍
りけれは　源やす寸
あさらは見る人も物思はぬの
いつもまさわにぞはしりらん
菊乃花おれるとぞ人のいひ侍
りけれは　読人しらす

いつもの菊になとろきてむかしそて
んもさへてしぬ人やおわりけむと
すみなるわきぬすなと歎侍りけ
ころ紀友則かもとよりいいまつ
とひをこせて侍けれは返事
に菊乃花をおりてつかはしける
藤原忠行
枝もなく猶に秋乃花こそわれあ
なていかけなくなかわぬつゝなわ
返し　とも則
雲もてよそひのうへにむかしは
千代乃秋にて隠れはきこしむ
延長比時秋菊かしありけれを
しそへてまつりける

貫之

松乃月光さやをともみそなはし
おつるうけをへ見てやつらむ
こいはまてす よくと人ふし
秋ニ詠
秋こよはしをそふ拾ぬ行は
春のへるともかそしきなん
男乃花つて遊そんとそ菊の香
とやはこゑはつかしこれくれ
さをよくそへてはかそし何る
みな人はおしまほくわと菊の色
君そこめよの露はをまくくる
こいし雅す
くく風よのつすゝ舟や秋のよ
月乃うへよわをふいこて読ん

紅葉乃散つもれる木のもとそ
天こ地はふいちる木の葉とまわくわ
すきり秋やいつらなるらん
見つゆくる男の紅葉を折りて
をくわて侍くまちち
思ひ出てみつはいかし 松をつる
くさ乃かまつまをを見すなかるらん
ふる月乃つくもつきみかも去らは
ひおをつきてをこそ侍くれ
ち
ちゐぬのむすめ
宇治山乃紅葉をこすいも月の
きりりをもきつすゝまし
九月晦日よ はし遊る

なかつきのありあけの月はありなから
はかなく秋はすきぬへらなり
おなしつこもりに
みつね
いつ方に夜はなりぬらんおほつかな
あけぬ限は秋そと思はん

後撰和歌集巻第八

冬哥

題しらす　　よみ人しらす

はつ時雨ふれは山辺そおもほゆる
いつれの方か先もみつらん

初時雨ふる程もなくさほ山の
こすゑあまねく移ひにけり

神無月時雨はかりを身にそへて　増基
しらぬ山ちに入そかなしき

冬くれはさほの川せにゐるたつも
ひとりねかたきねをそ鳴なる

ひとりぬる人のきくなく神無月
にはかにもふる初しくれかな

梢まて時雨にかはぬるなきなれゝ
ちることのは哉はつらさらん
吹風にちらさも見えくさとえくれ
けとかぬるよの方にのそ志くる
秋まてこなたも志くれの降ぬれ
ことわりもさへよ移ひよみわ
神無月時雨そわいふかすて
猶なゝそよさへなとか成らん
ここに月時雨とも音に神なひ
枯の木乃まて降にそられ
ひなつかしくる
むらむ木も枯まてぬきいつらの日
しくれよ乃こもぬるてはかな

山へいつとて　懐英法し
神無月時雨許をまちて
志くるぬ山もとにも入そふしき
十月斗に大江千古かもとよりおこせ
むとそしまうわさかれともとぬ
驚ふれいなかまてきこえ侍るを
をしける　藤原忠房朝臣
ふるさとはおしき節とも見しとも
志くれとこそよ降にこそ
返し　大江千古
もみちそも時雨もつゝし錦まそ
かへつも人をよはやとめぬ
影不知　讀人しらす

神世と月日とや回りてよろづ代の
やむ時もなくよるもこへぬる

ちはや振神垣山の榊葉は
しくれにいろもかはらさりけり

住ぬ家にまうきて榊葉に書ては
ひきそへける　枇杷左大臣

人もすまず荒るる宿をきて流れは
いろ木の葉は錦織ける
のへし　いせ

涙をへしくれよそひてふるときは
もみち渡るもことさへまさりける
たいしらす　よみ人しらす

冬の池のかものうはけにをく霜の
消て物おもふころにもあるかな
おやのおもひにまかりてまたくる
なれはまかりける　人のむすめのやつなりける

神無月時雨ふるにも暮るる日を
君まつほとはなかしとそ思ふ
こいしらす

身をふて霜やをくらん人の
ことのはさへに枯もしぬれ
冬の日すましまつりしける

人まちに君よつけてし歌の
けさしもとけもちぬるかな
こころよりける
さいしらす

うきくもり霰ふりしきるらむと
志ける庭とも人乃見るへく
神な月志くるゝ時そよの、
山乃こ松遠よも降てしめける
けさみれは嵐寒しくも尤風の
山きくもり雪そふるらし
黒髪みな志ろく成りけりあはれ
まつ初雪をあはれとそみる
あし引の山乃里の侘しきは
来てとふ人やなく見る人なき
ちはや振神な月にそ成けれ
こなたは時雨のふらぬとおもへそ
式部卿敦實乃みこ出てしよみ

河信乃るを後しくよみける
なれはもとの前斎宮乃みこ
みもとよりはいはるそと見なれ
いそ乃返事よみ
志ろ山は雪ふかぬまにあとくえて
今はたちよる人もあらなくに
雪の朝老をなけきて
兼ちて
降そめし友まつ雪はむはたまの
わか黒髪乃かはるなりけり
返し　冨雅郎下
くらさこみれるかりつる志ろ雪の
まちいつるもないうとくそ見ける
又　はしゆき

黒髪と雪との中のうきみれは
ともかゝ見をもつらしとそ思
ふへし　菅浦朝臣
年ことに志らみ粒をましく鏡
見るかけそ雪の友は志らなりける
影志てち　読人しらす
年ふれと色もかはらぬ松かえは
ことなる雪をかむとこそ見れ
霞れ乃枝にふ併る志ら雪の
消ぬまにまては花とこそ見まし
みこそ今はすゝしも流芳野の
やまの瀧は雪を拂もおとこてす
よ残きせさこね覚て吏へをしすれは

さしひもあへす霰やこほるらん
雪乃もとこしふるけぬよつらし
くるゝ　菅原の是もと
うつしてまよこゝろて天雪は
もみのおもふ人乃心ちかはわ
御氏部卿乃かりして家みまく
よわきのこを人のるをきくして
よみ人しらす
白雪乃ふりかへてこゝろのとまらぬ
とくるたよわたをるこそは残らん
こゝしける
思ひて腸ふくも咲るかへの春乃
袖乃こほりのとけすもあるか
あしむ乃年をゆくわくあるよよ

降つむ松まの緑ぬし山
乃こもる梅にはうきてぬる野の
今宵乃霜はいかに侘しき
白雲乃おりゐる山と見えつるは
ふりつむ雪乃きえぬなりけり
春雨乃雪はむとそふりつもる
許るる山里はおもひきえつつ
ふり積りのこおりぬる冬をや
松うき草み深にとしめぬ
んいかてしよ見にこそふりし雪の
ほのまとに花乃数よりたへなれ
ていうきにこほりよとらへれや
不つるよつきは青もふるもともぬ

なしふへて雪乃山かくはあやあの
枝をこつみて人もなし
ふ山乃池塘ありあるしあしかもの
うきねをするはいくよへぬらむ
山ちかくめつしをなく ふる雪の
ー絶くやなかん年つもりなは
松乃枝ふよりける雪乃いれをそ
冬の花とはいふへかりける
ふる雪は消てもしはしとまる梅
むも残ふも枝よなきところ
瀧川すふくそわ乃多ちはあれと
氷とけゆそり方もなし
降雪よ袖田ふりつみをとるや

つもりくてきえぬをうかり
よるならは月とそみましあかるの
庭しろさへに降つもる雪
梅かえに降をくる雪越まちて
ぬ乃うちつけに華とそみる
いはしかと山のさくらも家にとく
年浪こえてに春を待らん
ゆきしふかく降つむ雪を見るに時
こしみち白根にすきしかちある
年暮て春あけるに成ぬれは
千ふ乃さへぬしよまて雪
春ちかく成る志て雪は小倉山
峯にそ華乃盛なりける

みし乃池にすむ鴛とりのつれなく
下にかよひそん人にきこしすなる
むかしむ乃よる乃こふれる白雪は
てる月影乃つもるなりけるを
此月乃とし浪あまりふてきて
うくひすは鳴や鳴そ志なまし
冥こゆる道とは家しもちなりけり
年にさきはて春をまつらん
こくしをとの家毎にとしをへて
いひわかれ行くる残えあそます
てふみ年乃志はすのつもるその日つ
ごとしよう　藤原敦忠朝臣
物たもあとすくるはらも志てぬつるに
おとしも暮ふよそてぬときく

後撰和歌集巻第九

恋歌一

かくしてあひしりて侍りける人
につゝむ事ありて又あひかたく
侍りけれは　源宗于朝臣

東路のさや乃中山なか〳〵に
あひ見て後そ侘しかりける

思ひかけたる人に物語し侍りけるを
人のさはかしく侍りけれはまかり帰て
つかはしける　貫之

暁となにかいひけむわかるれは
よひもいとこそ侘しかりけれ

源のおほきかゝよひ侍りけるを後〳〵
はまからす成侍りにけれはとなりの
かへのあなよりおほきをはつかに
見てつかはしける
するか

まとろまぬかへにも人を見つるかな
まさしからなん春の夜の夢

あひしりて侍りける人乃もとに返
事見むとてつかはしける
元良のみこ

くや〳〵とまつ夕暮といまはとて
かへるあしたといつれまされり

返し　藤原のかつみ

夕暮はまつにもかゝる白露の
おくるあしたや消はつらん

やまとにあひしりて侍りける人の
もとにつかはしける

よみ人不知

うきつへし君かこひしき大和なる
ふるの山田のおもひいてつゝ

返し

松杉田乃いてゝふすをきえて
思ひ出ふからうきもしけりな
やまつゝふしける

人にふるんいそつわかれて又まこに
わすれはなにのもあつぬなかわ
ますき侍るもすゝ侍るころ又
あひしりて侍りける男のもとに
まいことはうち使てうせける
とふ思ひつゝといへりければ

いせ

おもひ川たえすなかるゝ水の泡の
うたかた人にあはてきえめや

影ふむ　三統公忠

思ひやる心はつねに通へとも
あふ坂乃関こしすもあるかな

よはきしける　讀人しらず

きえしなてやこぬ許年をへて
君をおもひ乃志るしなくれは

かへし

おもひいるしるしもなくて年を
あさぬまにけるか数はまさりける

さいしくに

ほしてゐぬれきぬへき唐衣
なくくたもとはみなしなくれは

よとく東よ西ふく滝川乃音ぞされし ち
そこなるうけをみぬる伝しな
家ことく西ひ因ふ人乃なき時、
ふかき心もうひしふかわくわり
いはしっとかの松山よ今いとそ
こ越なる浪よぬるて秘れ
世乃もとよ流らしける
人ことい満さとなかわくれ下紐の
とけぬよしるさきんいとおもへる
孫果て家志さひその今まては
ときぬる人乃恋ぬやくわ
世乃人ハ乃もとよつかしける

ほっみをいはく成しあすか川
昨日乃ふちぞけふなわける
返し
ふちをともいきやわ波ちをハ
わかみひとつそよるまもなく
影しす
光まつ露よんいなとしくるみハ
浪のへそつて音をそうむる
あるにはあつこといひくる人のも
とよをしける男く
玄こくぬうこともなけるやよと ともよ
乃るめなくして年乃へぬるん
あつよしのみてまうてきいわくれし
とあらすしてうへしてえのはしさ

まつかはしける　桂乃みこ

唐衣きてしみえわかしとよすら
あそかぬとおもふを恨みんさ
うひまちくる人乃ひきしら
さうそこなかわくれいつらくる
　きみめ乃ゐし
新しきもみえてすなわり山の井八
浅ましよわれふるやこしみし
かへし　平定文
あさしてふすをゆしこ山井を
ほかしおこりよけいみえしぬる
大いし雅すよこ人しす
いく度の生田乃うしよちかへ数

波よにす身かうちぬめせん
返し
ちつへわぬまてはひぬる汲なれ
いく田乃うしみちとこれ
め乃もとよ
あふすいとく雲わ乃大宮よ
いつ名乃こしてやこぬ許か
かへし
よりふるやむともや寸逢め
今こそやみちな渡るなるめ
へらまのことくむなれともしらやの
うしまいつかあるんとすまん
返し
あやこそ見ほきへかれい次あの

まどろまむとも おもほゆるかな

歌よみて

菱みくさ乃ふるすゝきさ年をへて
いみしうよぬるよふかきまで
見袖もちてあまし袖を衣
こゝ君乃もしてきるよふかき
女乃色とよはかりける

秋さつる花の心をつかてて
時さよみなるおもをそ恨る

返し

あくよこそ岩とみるゝめ夫は
うはらみなる世乃んを

その御よりくへかこんとて物のみ
うれしかる人乃袖をなるにて
さわ久れいつかしける
末むといひ月日をこすを松
山乃そはしき物よみてふくるの

返し

月日かもそへなる夫こふる
数をもきこえぬあかなかなり
のよ身をへていきしそよし
をのさまひかれかるを松こと
しをくる侍くるそとこ乃い
くる我その年もさてあくる
春まてしいと雖而侍くるい
こ乃めたる春乃山田を打よ

思ひやこりし人をわすれき

いきしあはぬかへあは寸侍り
ける女のもとにつかはしける

贈太政大臣

ちろをへてあひ見ぬ時はまつしむの
涙もたえるこそ下をわかるゝ

返し　伊勢

人こふる涙もむ(く)ちぬるころかな
いえぬおもひの水なるへく
男のてかしこに通ひすむ所
おほくてつねにしもまさりけ
れはかもみいろこのこなる名
ちりかゝるを折てつかはす

源このむすめ

つらしともいはて恨むほともなきす
わか家ちのくなく輝はそて
かへし　あつよしのみこ
里にとまり鳴こゑやかれ郭公
すまひせさせぬ天さつぬとて
えさるへきさまを思ひかけて
つかはしける　春道のつらき
うちなひきぬこゝ山のくれの郭公
人しれぬ音を鳴つゝそふる
いと忍ひてあひわたりける人
て後人めをつゝみて又逢かた
く侍れは　これはてのみこ

逢すみるといとうとはなからむ
むの孫くわ歌におよはん
哥乃ことよりこ草にふこ
をつけてをこせて侍りけるを
よみ人しらす
おもふとはいふにもともすれなし
こゝろ草乃むすやいかにぬ
返し
こゝろのことはいふ人
うへて見る歌はやまれてあくなは
まつえてる花にみえける
平定文か許より難波のこと
へなんまかるといひをこせて侍
りけれは　古今

浦ふすこゝろめかるゝ延喜の御時
時の難波乃つゝへしもり
返し　定文
君をおもふ事をよみてつくへよはの
わりなく見よりこ歌にやいかゝぬ
つくく成にけり人よつかりける
いを
みそてく心ひとつをふくしへよ
うくもはしくもなりてこすみん
さいつす　よみ人ひとしもち
ともまちまさはむかしへし寺鏡
人のたのしと見えつるふしき
きのひとる人よ侍りけしける

いもせ山人(谷)涙こそなかれ思ひ
人乃見ぬ乃ハ流てやよる
ひとをあひきわて後ひきし
うちとけてもつゝをこそなれ
うれしかりけるに天の川のわたしもの
くさよくゆるしよろこびける
こいしもち
りやしぬ夏ちるにほとゝ小夜よハ
天ハくもふる霧や雨乃行人
かいきやくあし乃声と鳴るを
音しきこす乃まくらもぬれぬ
住吉乃きし涙白波よるへくハ
あるみよそめに見えるそはちる

天こそとぬれきし袖のかわらぬハ
おもひ乃かなにわれハなかなか
あきなれし時いとふそ物とて
いつ今みつ乃も見えハ立ちき
世中よ思ひるこひの傳しかきハ
あひて乃後み逢ぬやなかわ
こひを乃そつきにすきるみ山なれ
ぬれし涙ねよのこなつぬれハなし
天のよわ歌なそはしなむこその
こすそ立しと思ひましやそ
男乃そしめて女乃もとよのぼりて
あしたふる雨乃ふりまさりて
かへしける

今そしるあかぬわかれの暁は
君をこひちにぬるゝ物とは
返し
よそにふる雨とこそきけおもひつゝ
けをとふ人乃袖もちとりふらん
はしわたるおとこに
絶たつる物とも人乃つらさこそよの
いと我この身の心ほとそかなしき
かへし
うちかへしなかれしいやつらし乃
くもてよたえすふゆふすい絶たを
思ふ人待くるよ世よ物のうへ
ひくまとつふらむくれて

つかはしける
思ふ人おもはぬひとをみなかよふ人
おもひそめしなん回りしるへく
返し
こゝろし浪森乃下草風いやこ
人乃なけきはおひてはくわ
身みたとせむつる絶えてをや
乃家よ乃わかへるとそ
おもをいひふしま物とてしゝと
うしろやすくもおもほゆれ
さいつしに
なきたむる袖こなかれしけきに
いとけても君をおもひそす

すまをわきてあましほくるおもひゆく
人をくるしといひけるものゝ故
雲井まて人を恋しと思ふ宿
あはれをあはれとみなくなりなくよ
人につかはしける
源ひとしの朝臣
あさちふの小野のしの原しのふれと
あまりてなとか人の恋しき
冨香
雨やまぬ折のむかしもちしに
こひしきよすみまさるに
かいこしやまやうきにゆる人やせと
いひけれはよみをとまちち

いせ乃海にとしへてもあまのあくなく
なかき心をこかるゝまるゝはる
人にはかへしける
たえて出て忘すそふ久しきちかひ
源よみてもる袖乃こひしれて
かくこふる物とやいよいよ
明まいは涙る扇なかましを
あひたち見す頼もかすみてし時
おもかけのこよなかわし
忘乃ことわりなき物ちなかふ
うつもはまてつることひしき
をんなにつかはしける
まつ海にふきん乃なみをは

ゆゝしき君をうらしもせん
み禊はいのるかひなく涙川
うきても人をよそにこそ見れ
返し
んゝのまくゝるこゝろ神をへだつらむ
くふわほうよ新乃こゝろよは やすか
大輔につかはしける
太大臣
ふかく深し袖乃いとしく
涙よそへもこそまとひける哉
いつゆよあひとしけす
見る時はすゝともなくこぬ時は
恋とわかれよ恋きやわぶ

男乃こんとてこさりけれはよめる
山里のまきの板戸もさゝざりき
たのめし人を待しよひより
そうしのびて人乃許につかはしける
ゆく方もなくせかるゝ山水の
いはまほしくもおもほゆる哉
女はつかはしける
人乃うへ涙すといへはきこえぬ哉
君もこひしきおもひこそすれ
かへし
つらきはたえし心にはうらむ
旅西人をおひせとも
をんなによつかはしける
人しれす思ふよんはおほしまぬ

あるとはあしになけくころかな

男のもとにつかはしける　中務

ちゝふくておもふしんに成るを
思ふこととそおもふつるやう

返し　源信明

佗しさを同し心ときくからに
わか身をすてゝ君そかなしき

のかう寸成りにける女の人に名さ
ちくまそつかはしける

さくめふくあてに咲ぬる花は
ともには松の心をやいとぬ

かへし　よみ人しらす

住よしのきしやあかなわをい年ふとも
松よりは深き心をのましや

おとこにつかはしける

うつろふもちるもなきすのあやしきは
はふくに菊の花ゆるしくわ

いろのあをき侍りけるに

しら波のよるゝきしにたちよりて
ねも見し物を住よしの松

男にはなれ侍ける

なかへてあつめぬまてにもえのこの
ぬるまていりに衣ありけり

後撰和歌集巻第十

恋哥二

女のもとにはしめてつかはしける

藤原忠房朝臣

人を見て思ふおもひもあるものを
そらにこふるそはかなかりける

こふみのさて岑

梢のこおもひくらしていかにして
おふし心に人をこしへせ

きのとものり

こゑいつちゆくしてかこぬ人を
おもひやりつゝねてまもらん
まつことやりけるぬよつかうし

〃

源中正

なみたをつゝみてすよこえもなむ房
しつこのんよむすそさらしめや
人をいひさしせとて

兼覧王

あし曳の山下しけき夏草の
ふかくも君をこふるころかな

忠房朝臣

うくかぬよ思ひ侘るわかみかな
かても蛛となりやしなまし

女のさうしによるくちよわて
物ふといひての ちち

藤原輔文

あふことのみえてのちそとおもふよも川

ちきりはゝ世をもふかゝらん
かこつともかへすもせきかぬる
世の許につらしかる
よミ人しらす
あやしくもいとふにはゆるこゝろかな
いかにしてかは思ひやむへき
くもゝちかくをもをかしきそわかれつ
うらしかる　本院左京
ともかくもいふことのはのみえぬかな
いつらは露のかゝるところそ
題不知　橘敏仲
佗人のそほつてふなる涙川
おりたちてこそぬれ渡りけれ
返し
太輔
ふちせとも心もしらぬ(す)涙川
をりやたつへき袖のぬるゝに
又　敏仲
心よ於もひてむなしき川
うきせをもふかれし逢やと
わたとのはあしてや時し物いひ
ふきし侍ける女のいみしもあふえて
人よそうつれてはかりのえれいと
乃ぬ物よみきつけてつかはしける
藤原敦忠朝臣
かくてつゝける人乃心をしら露乃
おきけるものともたのこゝけるか
あひしかりて侍ける女をひきそ

しのひて侍けれはいとひさしう
ありて侍と人のつけ侍けれ
は　藤原顕忠朝臣
常よりも雲井に絶てなく声を
春乃きりとそわれはきゝつる
あひかよひける女のもとに人の
あひぬときゝてつかはしける
平時望朝臣
かく許つねなきよとはおもふらむ
人をさるかはこのころをも
男のこゝろかはりにけれは
こまちかあね
家つの一むら薄かれなくに
君か手なれの駒もこぬかな

こゝろさす　枇杷左大臣
よ我海乃中にはしみけれ（よみけむ・かなれ）
うちむかすかす影ふかりける

返し　いせ
わたはことこのぬしすも（あやなしや）
家つりわかれの心は恨む
人のもとにつかはしける
源等朝臣
東路乃さ野の舟橋かけてのみ
おもひわたるをしる人のなき
人につかはしける
紀長谷雄朝臣
ふしてぬる夢路にたにも逢ぬ身は

松原まよしきうはことゝなる思
昔をしける　読人しらす
あるとし人を呼ぬといひおこせて
京にありきしつる時弁[illegible]
よもすからぬまて侘つる衣
ある時山に花まとひして
男にはなれしける
おもへともあやふしとのこいたれし
よるのまきつきちこされたれ
昔のもとにつかはしける
吉野ときこえし三輪の山よりも
松乃すそいこゑつるをまかりし
その数思ひへそきる心あるを
いへるむすめの返事につかはしける
亘源朝臣
難波にて刈つむ芦のあしけれは
ひとへも夫をわきやへつる
寺を隔にまかりけるによりやむ
ことなき事によりて京へ人
つかはしけるついてに女のかし
に書付侍ける　よみ人しらす
家をも夫もおもふる志て家の
おもてしも出ても被乃かぬ
あひきるて侍る人のもとより
ひさしく音すくていつる
やまといきつるやといひおこせて
侍りけれは

はかなくもあはんと思ひよりけるも
人やけぬるとおもふ戸はしきりま
人乃許に志のひてまかりけれと
逢ことかたく侍けれは物よりきつ
を侍ける　在原業平朝臣
菅ぬやそしけりへくもあらなくに
ことゝるくものへ隔まかりけり
男侍女をいとせちにいひちきを
侍りける女いとわりなしとい
きせけれは　元良乃みこ
わすれなしといふこそつらけれ
おなしくは跡と見てぬと思へは
女のもとよりわかきさしのかとそ

ふんえしてぬといつはりけれは
藤原興風
我恋をまてらんと思ふこそこのうらに
ちるむ波乃数をつらるへしら
いひよりける女乃もとよりわかふ
をきりよりてよめいつよといつわ
りけれは
貫之
ことなしはうつる許もさめてしまし
おもふ心をえやは見せける
物乃さうひ侍る女乃もとより
つらしとわ侍るよんものあると
て通すもせとわけれはまつ
いけるる　大江朝綱
あし曳の山井はあさくともふかく通ふ

ひとをとも見ぬはくらしおほかを
おほつ子に物のことひつはし
くる我をしよきていましわれ
きつりける　九良のみよ
大かたはなるや名たる乃たしゝん
雪乃つらと人よかくしせし
うへし　　おほつ子
人をいまこゝなる名のおもかれ
むかしもしとも志てむちよとそえん
返事をまりくるせ乃文をそへ
うしてえて　　よみ人ふ知
源これいかなく志き乃をはちとわ
今はいはれまきくかしくまき

おほしにつて見のかしなつこえ
あそきりくるめよ
はとえて涙しぬ中にちかうきは
いそて物思ふなくこやくわ
ゆきしかくくるめにはまつしける
　　橘忠幹
あふ雲に鳴りわ乃声にめてし
きこわきりつてあふよしもがな
　　男くて
すこ桃え乃波にあしめとより
心我妻によせかてもうふ
　　妻情に流らしける
　　よみ人志らし

見ぬ程に年のへぬれは逢事の
いやまさりにおもほゆるかな
まわいては御ふみこまかにいわ
くるとは　中将実衣
きのふることしのふまし物を後
ひとつこゝろをそむと君はいとはまし
御返し　延喜御製
うつゝにも夢にもわか身と我こそ
まとひしかとやなりけるかな
こゝ定寺　前きこのちらぬ
ふかれてはゆく方もなし瀬川
流る乃うしや浮ちまらん
あわれしのむはやふ

わか恋乃きちよしとてはわかの
涙乃まもこともつまぬつゆや
貫之
流にもおもひ乃浮る物ならは
いとかくむねはこかるまし
もろみうつ乃是則
志るしなき恩ひや我と思らの
声にふくまてに逢事侘しな
手久しくなそし侘るる人に
つゝしるる　貫之
む乃緒の絶てしまは家とて
とし月ふゝききひもすゝる
影ふさ　平定文

あらみこやもえて流るゝなんよしとも
思ひもあらぬふしの千代の懐こと
返し　きみの光のと
君か代の千代もえやするともいはん
まもるこゝろしてあらぬかは
いそせる世の家の千代わかの月
みていひいまと詠みける
つゝ松き
佳やるこ新月は露をおふしくは
天かかきたの草に流あまて
こゝしす　在原元方
ころもかるなきさやいつこやふこふと
ちるよる方もしてぬわつ

東言よふるとこいふともとと
にめとかいひけるにおやの床を
きしてねて人の心は又のあ
しきにつるとしける
藤原滋幹
ふるとよわもきし出きれし梅よわも
わまそよるへもなきいちを
たいしてあちよこ人してあち
高砂のことの千代と代かりける
人懐の我こゝろこけるかふ
長明の身この母の更衣きこと
に詠みけるにはそしける
延喜御製

よそにのみまつはつらしな住の江に
りてともへこそ見まくほしけれ
こいしくは　　等朝臣
つけるみは見し許や演ある
おもくまもさしぬ恋はなとかん
あるにはさわかふるえなまし
わくる人につかはしける
藤原兼茂朝臣
やはらのそこに波はりつゝおもふ
わかまていしも波乃まなき
め乃許につかはしける
橘実利朝臣
はしともおもひかなてぬ淀川

ふかゝりて人をしぬれむらさ
返し　　よみ人しらす
流てとはたのまぬ人し淀川
うきを見ゆへくもおもほゆなく
人をいかわひてつかはしける
平定文
はるすを今はましもちはやふる
神もいさめぬ恋ならなくに
返し　　お保つ子
ちはや振神もみこともいひつくめ
さるはしいのるも手もへぬなには
め乃許にまうてわかれをいとしまて
へし侍られいけるを侍ける
ぬかしく

男かく

うらみても身こそつらけれ唐衣
きていたつらに返すとおもへは
あひしりて侍ける人をひさし
うとはすしてまかりたりけれはつよ
ミ返しつかはしけるよ

壬生忠岑

すみえの松よちとせまつる志て波の
入れおりまや林なつかるらん
男乃許よりいまハおと人あんな
返しといつかれいわよそわて
よみ人しらす
思はんと契しすもある物を
なきなをいそしてよさん子

返し

きりはらの乃ともはひみ野ちこ物を
なきなといろくつこもこ椅れ
さいし給ん
さてまてし思ふなけれ乃縁をや
身ちをつし乃杜といふらん
この人乃いそわよくれよ

右近

おもはんとたのめし人ハありときく
いひしことのはいつちいにけん
きこゆる殿下乃こやす侍きよ
うけ乃殿辰と身ちの国よあると
ころくをつくしてうよよこうそ
して今いよむへおほふしといひ

かへし　源清蔭朝臣

きてしも松まつ手斗鳴乃まされ
ちよわぬへくおもほゆるかな

ことゝ女乃ふミを女にてや見むと
いひくるよ見せきりくれいうして
くるまよせのふミ乃うしろよ書付て
つかはしける　よみて人不知

こまいかく恨不もなき物を
うしろめたくはおもはさらなん

久しうあらさりける女よつ
かはしける　源もろあきら

思ひきやあひミぬ事をいつよりと
かそふさわよなきむも乃とは

こひしけれは　藤原忠房

よみつる手乃声をしたつ人は逢す
涙乃い河もせとなりける

大伴黒主

白波乃よせくるいそまをこく舟
かちとりあへぬ恋もするかな

源うしゝ

忘しきさを怨ぬよなくきかむとも
はやしくあひぬめとも見えされ

年へていひ渡りける侍りける
よ　源たくる

久しくもうひけるかな住の江の
きしよ年ふる松ならくよ

影供　藤原清正

道事みよしをへつつ呉竹の
ふしのまなき恋もするかな
みることよ成ぬる人よ寄恋
をこひいる枝につけてつかは
しける　　読人しらず

今いくふんはくいの山のたまきは
こもちむよわこそうるそわれ
女許よわつへりて侍しよまつ
かはしける　源兼光朝臣
みわのん京も老てわすをは桂の
山よりいてし月をこしものよ
道瑠綱ハよあひむしめて常

よしもなきわけるなしよ
　　清正母
深きけぬ天の宮けの京ゆへ
こもとよとひぬ水きよのぐわ
かくあこえわひる浪さえよのか
ふとてし　藤原元真朝臣下
ては時もこのよは恋しもよ天をそさきて
あやしやいくほのよのね
こくしく　　大江千里
おもひやるんよこふなわをい
一日よちいひ天は見てまし
きのててとひ侍るめのもとと
よかなわもこうそくをくわて

ゆくへをすれるわきぬゆくゝる
よ
元良のみこ
逢ことはとをき山とり乃かり衣
来てはかひなき身を乃ミそ鳴
こゝしす　ゆつよし乃こまい
ふかく乃こ思ふかひなかりし乃夕の
ふてしも人よあかれとそおもふ
思ひて逢ゆくゝる人よ
藤原忠国
らちこり少殊よるはほのかくしつて
あわへを恋乃下よけぬへし
寛平乃御のとれくしおちさて
を歌て乃こ綴れ帳乃やくわ
よ殊こ人はきよこいを殊てくとう
もめしよせきわ久れいつきこて
床帳よむそひつけゝる
小八条御息所
忘よしいけあむ許ちくゝ殊と
妹のふこそ乃男をすへゝん
事乃もとよはすらしゝゝる
古ゝく
承徳を久つよるま乃まつ山ゝ
宮よわ波乃こしぬりいなし
目を衣といよいむなわとふよ
人乃まくゝれい　よこ人きつくく
檜よ乃絶しもまくよおきみつゝ

月をあはれといふこそおつゝ
男のもとよりつかはしける
かへし御おしまこ家名はいもいて
いまやせよとう今はつまをなを
ちりそめて人よのさまひつかはしける
人はてしはいふ花のそ花中よわ歌
おもひはくるしき山は見えしける
そつるに人を見てはなかりける
要文
こよわるもあはぬ思ふはなにしきは
さゝ海を人よつくるなかりけり
人乃家よわ物見よいつる事を
見てもいつきまおほしくれはた

ふところにつくれいてける家
のあるじときゝてよそしける
よみ人しらず
人つまはいかやなくかけそ濃
なやう菜物は花つまなれける
人数おもひつけていちもある
ちやうそくれも乃もいそまして
りうすまいたなるもなつかしくちと女
てけおもりつけゝる女の許よわ
ふとつくすまくしくいとひそ
侍かりきこそ
いとそし思ふにあはぬ演風よ
ちつしき涼乃よるなる德しき
四つけて侍りしといひつかんなそ

あくはまたなきもの乃にみえて
なかれつゝありしをるに
狩乃こゝろまさりくるしよふにゝる
荘よおきいてゝ男かまきゝえん
おとこ乃めよせてつかはしける
を返すもせすしてえよくれは
又はかりしをる
ふしなくて男かうつしゝる白衣は
よわつまとくゝき物よそえてくる
男装旅よわもそて来ていふ
なんまてきゝつるといひて侍
くる返事よ
草枕たひへはる年月乃
うきふへわてうけしるなん

男乃ほと久しうあはれまて
来てこん乃いとつくれとよ
十二年ふ山こもりしてなん
ひとしうきこてさわつるとい
ひへつわされはよひかさて物
なとからて返しつかはしける
又をとそもわくれた
いてしより見えすなりにし月影は
又山乃はよ入やしぬらむ
返し
阿し曳乃山よおふてふもろて
たちともよこゝろかよはゝ
人をおもひけてつかはしける
平定文

さるちとせまてむとしれと　なれむる
らくうちをつふこ家をとこす波
返し　おほつふ〇
けふみ瀬ことよふまん波ゆへよ
たのむましきをはかとらえん
人のもとよそしはよとはら
さしいわけるよ返すいふくて
いとかく我ひきすすひてへ
しいわけれと
源もろあきらの朝臣
はるは生ふともなし草をとこそ　とて　ころよ
来むこと須すすまわける

かくてなこそて侍りけれとこ
やつへきる人ありけれといと
まふくて又のたいしよとこ
夜のむよはけてしをこそて侍
りける
さく露のておる梅といおもへとも
枯をぬものいふてしこの花
うへし
うれすともいのこ来まんなてこの
むなとききこち涙くみあへぬ